

書評「よく使われる 新聞の漢字と熟語」

(豊田豊子編 凡人社)

石井敬子

本書は、昭和56年5月31日に、凡人社より発行されたものである。編著者の「まえがき」により、まず編集意図・内容などを簡単に紹介する。

「はやく日本の新聞が読みたい。日本語で専門書が読みたい。」というのは、日本語を習い始めた外国人の持つ共通の願いであろう。本書は、国立国語研究所報告56「現代新聞の漢字」から、よく使われる漢字とその熟語を選び、外国人が勉強しやすいうように意味、例文をつけたものである。内容は一部と二部に分かれていて、第一部は、よく使われる漢字を上位から500選び、その漢字によってできている熟語を3つずつ、使用度数の多いものから順にのせている。第二部は、漢字全体の順位1000番までのものと、1100番までで特に使用度数の多い熟語を持つ漢字をのせている。その結果934の漢字を扱い、訓読みものは除いた。これは、熟語の場合は音で読むほうがずっと多く、音読みをまず習うほうが効率的であるという見解に基づいている。この本は、ごく初級の人のためにはつくられていないので、漢字を100~150字ぐらい習ってから使うことをすすめている。なお、「この本で扱った熟語のテープを用意した」と書かれているが、まだ別販されていない模様である。

筆者は、昭和56年10月から昭和57年7月まで10か月、東海大学で実際にこの本を使用してみたので、その実践報告をもって書評にかえたい。対象は、先般東海大学との提携により初めて来日した、東独のフンボルト大学日本語研修生6名である。熟語のテープはまだ手に入らなかったため、筆者自らふきこんだテープを7本(一組)ずつ、各研修生に渡し自習させた。授業は毎回、主にこの本と新聞記事の音読との組み合わせ、及び復習のためのテストという形式で進行した。9か月後、最後の授業で研修生達に対し、教科書についてのアンケート調査を行なった。それによると、この本は、新聞などが読めるようになるのには、本当に役に立つ教科書だ、としている。具体的な長所としては、(1) 漢字だけでなく、熟語とその例文も入っているから、とても役に立った。これを使うと、熟語が文脈で習える。(2) アイウエオ順にならんでいるから、いろいろな政治・経済・文化などの分野に使われている漢字が勉強できた。(3) 熟語の意味と例が書いてあるので、辞書なしでもよく勉強できる。

欠点としては、(1) 同じ熟語と例文(全部ではないが)が繰り返し出て来るので、新鮮な学習意欲をそがれる。例)「協議」-「議」の項と、「協」の項とで出てくる。「教育」「経済」「経営」「結果」等々。「協議」の場合を例にとれば、「議」の項で一度出て来たものが、「協」の項で再度出て来たら、その旨何らかの指示をして欲しい。例文も別の情景を想定したものが望ましい。(2) 留学生達にとって、意味の項で、ひら

がなだけでの説明は判読しにくい。例)「違反」一やくそくやきまりにそむくこと。「結果」一あることがもとでおこったことがら。「完全」一たりないところやかけたところがないこと。私見では、この場合漢字を用い、それにルビを施すか、あるいは何らかの工夫を凝らすべきだと考えるが、いかがなものであろうか。(3) フンボルトの学生には、訓読みも入れたほうがいい。一この点に関しては、編著者もことわっているように、もともとこの本には訓読みが入っていないのであるから、必要とあらば教科書の付加として訓読みの指導を別にしなければならない。

熟語のテープについては、時間がかかる、という理由で、使用状況はあまり芳しくなかった。にも関わらず、聞き取りテストの結果は常に良好だったので、フンボルトの学生に限っては必ずしも必要でないかもしれない。

昨年来日した時点では、大きな活字による広告記事も十分読めなかったのであるが、10か月後には、普通の新聞記事が教師の助力なしに70~80%まで読めるようになった。また、昨年10月に行なったのと同じテストを10か月後に試みたところ、書取テストで平均4.7点アップ、読み方テストでは平均2.2点アップの成果が見られた。

漢字教育は内容が広汎すぎて、具体的な効果を測ることがなかなかむずかしいものである。「新聞が読めるようになる」という目標設定及びその手段に着目したのは、なかなかの焔眼と言える。この本と新聞記事との組み合わせは、新聞が日常生活と深い関わりを持っている上に、成果が具体的にわかるという点で、かなり良い方法である。但し漢字は忘れやすいもの、常に反復が大切である。